

華嚴の仏身と見仏の意義

陳 永 裕 (本覺)

1. はじめに

本論文の主題は「華嚴の仏身と見仏の意義」で、華嚴で言っている仏身と見仏の意味を考察するものである。華嚴の仏身は宇宙に充滿し、また、仏は法をもって体とするため、その清らかさは虚空のようでむしろ全ての色を発し全てをこの法の中に包含する。時として真如法界の中で形もよごれもないと言われる。にもかかわらず、衆生は仏の種々身を見て全ての苦痛が消滅し仏身を見る瞬間、業障と魔業が消滅するとしている。また、見仏は光明の名前で、この光明が将来死んでいく者を悟らせ、命が終わると、その仏の浄土に生まれるようにする見仏もある。

衆生が仏を見れないのは、愚かな者が五蘊相に執着したり、真性を知らなければ仏を見ることができないからである。なお、心の動きが全ての世間を作ることが分かれば直ちに仏を見ることができるとも言っている。しかし、衆生が悪業をなすと、その悪業のため苦痛を受ける報いが障害となって、仏を見ることができず、または、信心のない衆生も仏をみることができない。この他にも『華嚴経』では十地品など随所で見仏を強調している。このように多様な意味を内包している華嚴の仏身と見仏の意義を考察する。

2. 華嚴仏身の様々な形

2.1. 『華嚴経』における仏身論

吉蔵 (549–623) の『華嚴遊意』には、『華嚴経』の説者は釈迦の所説なのか、舎那の所説なのかに関する問いかけを三論宗の創始者である法朗が初めて提起したと記録されている。これに対する答えとして、当時中国仏教は南北に分かれ、二つの解釈があったと前提する¹⁾。そして結局、化仏である釈迦は本迹仏の教義に沿って報身、法身とは別のものではないという理論も盛り込まれている。

『華嚴經』の主仏を毘盧遮那とみるのが一般的な常識である。その理由は、すでに經の品目で盧舍那仏品または毘盧遮那品が挙がっていて自然と如来と表記される全ての名称を毘盧遮那法身仏と理解するからだ。次は『華嚴經』の仏が正覺を得てからあまり時間が経過していないいうえ、正覺の場所が摩竭提国となっている部分から、化身釈迦牟尼を思い起こさせる。実際、十定品、阿僧祇品、如来随好光明功德品で世尊と言いながら、説法する場面は、『華嚴經』の仏身論は名称に拘らず、非常に包括的であると言える。後で中国の華嚴学者によって『華嚴經』の仏身論が十仏の境界、または果分不可説として十仏の自境界が強調され、法身毘盧遮那の方が強調された面がないとは言えない²⁾。また、澄観によって三聖として普賢・文殊と毘盧遮那が確立され、これにより華嚴の仏身論は法身毘盧遮那仏に代弁されるようになったとしている。そして『華嚴經』には如来と菩薩、善知識に帰属される種々の身があるが、これに関する研究は以前に発表した論文を参照してほしい³⁾。すなわち、『華嚴經』における如来身は有限な色身から無限な法身に至るまで、包括的な意味合いを持っている。これを支える華嚴学者の仏身論をみてみよう。

2.2. 華嚴教学における仏身論

2.2.1. 智儼の二種十身仏身論

智儼（602-668）の仏身説により華嚴宗では二種十仏説が華嚴仏身論の軸となっている。智儼が『搜玄記』で華嚴説法の場所を論ずる中で、仏の三身を見る見解に局と通があると前提し、通見でみると、三身が共に具有して普賢身と華嚴世界海に一一互成するもので、一乗によると、十仏が合せて全て通じるという⁴⁾。特に離世間品の十仏の解釈においてこの十仏を三身仏に対応させているところである⁵⁾。また、智儼は見仏と仏身を論ずる中で、仏の名数においても一乗は無着仏などの十仏、三乗は法身、報身、化身の三身仏、小乗は生身仏と化身仏の二仏を挙げているという。法身の異名は本有真如で化身の異名は修生行徳、小乗の生身と化身は慈悲愛行と解釈する⁶⁾。また、智儼は仏身について、まず華嚴の十身仏を重視している。そして、これを一乗と三乗から眺め、一乗に会通することに力点を置く。これは盧舍那仏品の「他方仏成化義」からも見られる。小乗教では他方はなく、仮にあるとしても此方仏が他方に行って教化するものだとし、一乗ではただ十仏があり、体によって大道を解釈すると、一切種体と一切種相と一切種用があり、全て釈迦の海印定中の出現で他の仏があるのではないという⁷⁾。根本的に智儼は仏身を一乗教義に会通しようとする意図を持っている。また、仏身の

常と無常を問う項目においても小乗，三乗，一乗に分けて答えている⁸⁾。

智儼は仏の衆生に対する廻向行として仏の三身を説明する。小乗は実仏報身として，王宮に生まれ菩提樹下で正覺を成じたこと，三乗は三身を成就したこと，一乗は二種十仏として解境と行境の十仏説を説く。智儼の仏身論，解境十仏は第八地の三世間の中で仏身，衆生身などを指している⁹⁾。また，如来相海品（如来十身相海品）を解釈しながら『華嚴經』の不思議法品，如来相海品，仏小相光明功德品で，ある人は三身に仏身を解釈するが，決して正しいとは言えないとしながら，『華嚴經』ではただ二種十身仏があるのみと断言している¹⁰⁾。これを通して智儼が晩年に華嚴の仏身は二種十仏説と確定していることが理解できる。

2.2.2. 義相の自身眼目仏身論

智儼の直弟子である新羅の義相（625-702）は「法性偈」で，「法性円融無二相，諸法不動本来寂」から始まり，「窮坐實際中道床，旧来不動名為仏」で終わっている。しかし，その釈義において旧来不動は旧来仏の意味で『華嚴經』離世間品の十仏を指しているだけで二種十仏説は見えない。旧来成仏は菩薩または修行者の煩惱断尽と同時に自分の旧来仏性の自覺を意味することが分かる¹¹⁾。このような旧来仏性の自覺は，法性偈の次の句の初發心時便成正覺に相應する。

義相の仏身に関する考えをさらに深く考察するために『法界図記叢髓録』を見ると，普賢が内に向かえばそれが十仏で，十仏が外に向かえばそれは普賢であるという文句が出ている。また，『古記』を通して義相和尚の十仏に対する文章を目にすることができる¹²⁾。『古記』には義相和尚が大伯山大蘆房に留まった時に真定智通などのため，行人が十仏を見ようとする者は当然先に眼目通などを有するように説いた。何が眼目かという問いに対し，和尚はこう答えた。『華嚴經』をもって自分の眼目にするもので，いわゆる文々句々が全てこの十仏である。これ以外のもので仏を求めて観ようとする者は不見するだろう¹³⁾ という部分だ。この文言から義相の仏身は自身眼目をもって見仏することであることが分かる。

2.2.3. 法蔵の三身即十身仏身論

法蔵（643-712）は『華嚴經旨帰』で，十義をもって『華嚴經』の重要教義を説いている。その中で第3説経仏では『華嚴經』の仏身は盧舍那身と前提し，一身と多身の関係で解釈している。仏身は一ではなく，異でもないため，同時異処に一身円満であるという。そして，その理由として十重の無礙を挙げている¹⁴⁾。これは法蔵が仏身の無礙円融を表したものである。第10の円通無礙で華嚴の仏身は，理事，一多，依正，人法，此彼，情非情，深淺，広狭，因果，三身十身に

(30)

華嚴の仏身と見仏の意義（陳）

同一無礙自在であると結論づけている¹⁵⁾。

従って、法蔵が円通十身を強調したあまり、三身即十身という見解には、前述のように師匠である智儼が三乗の仏身を三身と解釈し、一乗の華嚴の仏身を十身、あるいは二種十身と主張したこととは相反すると指摘することができる。法蔵は法身体性十種義も華嚴の法身無礙の思想を基本に解釈した¹⁶⁾。『華嚴經探玄記』の帰敬偈では十身盧舍那充滿諸法界から始まる¹⁷⁾。なお、60巻『華嚴經』の全八会の仏身について論じている¹⁸⁾。法蔵は初期の著書では円融無礙十身仏に偏り、このような脈絡から、師匠と相反するように華嚴の仏身を三身即十身と主張したりしたが、後から国土身などの円融三世を表す智儼の解境十仏の方に偏っていることがうかがえる¹⁹⁾。法蔵の結論は華嚴の仏身は法界にあまねく存在する十仏身であるところにある。

2.2.4. 澄観の三身円融仏身論

澄観（738-838）は『華嚴經疏』で經を説いた因縁を明かしながら、時、処、主、三昧、現相、説者、聴者、徳本、請者、加者²⁰⁾を挙げて第3主について解釈している²¹⁾。すなわち、澄観は基本的に法身である真身と応身の無分別円融を主張しながら、智儼の二種十身に従っている。また、澄観は十身の中に如来身があり、菩薩身があるため、三身が十身という法蔵の主張も受け入れている。従って澄観はこの二種十身は同一無障礙法界身として無障礙法界をもって体をなすため、四法界のどこにもあまねく通じないところはないと結論づけている²²⁾。

さらに澄観は『華嚴法界玄鏡』の最初の部分で『華嚴經』の經題に仏の十身を対応させて解釈しているが、これは²³⁾十身を重視する澄観教学の一端であると言える。なお、「十地品」の第八地の解境の十仏を重用していることもうかがえる²⁴⁾。澄観は法界縁起の完結とも言える四種法界を完成させる²⁵⁾。この四種法界が解境十仏の依報とすれば解境十仏はまさにその無礙法界に充滿する正報の主体になるだろう。そして、この十仏は固定されている存在ではない。次につながる三聖円融は三聖の融合と共に、文殊と普賢の行を実践する人なら誰もが現成できる十仏として表れている。このような内容は三聖の円融を通して毘盧遮那²⁶⁾を具現しようとする澄観の仏身論からみることができる。

3. 華嚴見仏の意味

3.1. 『華嚴經』の見仏の多様性

これからは『華嚴經』全体を通して見仏の多様な意味を考察してみよう。

(1) 仏は真如法界蔵にとどまるため模様も形もないが、むしろ衆生は種々の仏身をみるとする²⁷⁾。また、仏は法をもって体をなすため、虚空のように清浄でむしろ全ての形で現れるという²⁸⁾。これはまさに仏身は無身という意味になる。衆生が業の差により仏の示現身をみることになるという意味で解釈できる²⁹⁾。

(2) 仏身は種々身、真実体、仏法身、妙色身、智慧身、無量仏などを見るとする。これは仏身の性格を表したもので示現身としては種々身と無量仏身があり、法身、色身、慧身をあまねく備えたものとして、後から三身に集約されたと見ている。

(3) 仏身は制限がなく清浄さは虚空のようで、仏身をみると直ちに全ての宿世の業障が消滅して究竟清浄を得て一切の不善法が消えるという³⁰⁾。特に入法界品では見仏してからは全ての渴愛が除滅され、諸根が清らかになり、菩提心を発して大智慧を得て、菩提道を成就すると、見仏を讃嘆している³¹⁾。

(4) 見仏が外から仏をみることだとすれば、夜摩天宮偈讚品では衆生が自分の心が世間の全てを作り出していることを自覚すると、すぐに仏を見て仏の真実性を悟るという³²⁾。また、如来出現品では如来が悟ってから衆生をみたら、如来とまったく異らない広大智慧を自分の中に完璧に備えているため、愚かさを切り捨てればまさに自身の如来性をみることができるといふ³³⁾。これは華嚴の唯心の見仏と言えるだろう。

(5) 不見仏と能見仏は絶対に仏をみるのできない場合とよく仏を見ることができるとを意味する。まず、仏を見ることができない理由は以下の通りである。衆生がその愚かさから目に見えるものだけに執着したり、固定した形が本来存在することなく、縁起であると悟らなければまず仏を見ることができない。また、五蘊相に拘り真性が分からなかったり、智慧がなく、罪業を犯し果報を受ける極限状態に直面すると、仏をみることができないとも言う。さらに、邪命で生活を営み信心の眼がないため、仏を見ることができないと強調している。声聞弟子も仏を見る器にならないうえ、心が清らかではないため仏をみることができないとしている。

次に仏を十分に見ることができるとの要因は、煩惱のない清らかさ、法性を悟ること、無礙眼を得ること、念仏する心に動揺がないこと、菩提心を発すること、唯心の真理を了達すること、三昧と願力に助けられること、衆生のための示現仏をみること、仏国土に往生して十方の仏と菩薩を見て、傲慢と不浄が消滅することなどである。

(32)

華嚴の仏身と見仏の意義（陳）

3.2. 見仏のための眼目

仏を見るために見仏の基本となる眼について經典では説いている。『般若經』では五種の眼、すなわち、肉眼、天眼、慧眼、法眼、仏眼を意味する³⁴⁾。『大智度論』では肉眼の不足を補うために天眼などを言っているだけで、結局、仏眼が一切をまんべんなく見ると言っている³⁵⁾。これに『華嚴經』では五眼をさらに加え、十眼を挙げている。つまり、菩薩は肉眼で一切の形を見て、天眼で一切衆生の心を見る。なお、慧眼をもって衆生の六根と対象境界をみて、法眼で一切法の如実相をみて、仏眼をもって如来十力を見る。さらに、智眼をもって諸法を知見し、光明眼で如来の光明をみて、出生死眼で涅槃を見る。無礙眼で見るものに障害がなく、一切智眼で普門の法界をみるという³⁶⁾。法蔵は五眼を説明する。肉眼は一塵が体性のない形だけをみて、法眼はその塵が縁起で成り立っていることをみる。慧眼は塵の体性が空で所有できないことをみて、天眼は全ての分別を越え二つでないことを見て、仏眼は主客と時空を超越して有無に平等であることをみるという³⁷⁾。

以上の五眼、ないし十眼を得るようになれば、自然と仏をみるようになる。特に、智儼によると、見仏と仏の名数は一乗・三乗・小乗教で意味が同じでないと前提する。従って、小乗教では色身仏の三十二相などの実色相を見る見仏で、三乗見仏は即色是空などの仏体と相応するもので、一乗教は見聞以前の生滅相のない姿をみる見仏として離世間品の無着仏などの十仏を挙げている³⁸⁾。さらに、一乗教は『華嚴經』に基づき十仏を見て、三乗教は法身、報身、化身の三身を見る。なお、小乗教は生身、化身の二身を見るという³⁹⁾。また、見仏は信と解を経て行を成就する段階と説くことで、華嚴の信解行證における行の段階であることを明らかにしている⁴⁰⁾。智儼のこのような教判による段階的な見仏の解釈の後、李通玄の人中見仏、諸天見仏、諸龍見仏、仙人見仏、外道見仏、八部神見仏、小乘人見仏、縁覚見仏、権教菩薩見仏、一乗菩薩見仏⁴¹⁾の十種の見仏の解釈が続く。

3.3. 離世間品の十種見仏

『華嚴經』離世間品では十種の見仏を挙げている。これは見仏の代表となる。その經文は次の通りである。「菩薩摩訶薩には十の見仏がある。十は何かというと、第一は安住世間の成正覺仏なので無著見であり、第二は願仏なので出生見である。第三は業報仏なので深信見で、第四は住持仏なので随順見であり、第五は涅槃仏なので深入見である。第六は法界仏なので普至見であり、第七は心仏なので安住見である。第八は三昧仏なので無量無依見で、第九は本性仏なので明了見

である。第十は随樂仏なので普受見という。もし、この全ての菩薩がこの法に安住すれば直ちに常に無上如来を得見するだろう」⁴²⁾と説いている。この経文について法蔵と澄観は詳しく解釈している⁴³⁾。

以上のように仏を見るためにはまず、仏を見る眼を得なければならない。なお、その眼をもってそれぞれの分上で自分の水準で仏の姿をみるようになる。反対に見仏の対象になる仏身にも様々な差がある。華嚴の見仏の中心は離世間品の十種の見仏がその代表になる。これは十種の仏の姿があって、十種に仏の違う姿をみることになる。法蔵と澄観の解釈を通してこれを理解することができる。

4. 十地品と入法界品の見仏

『華嚴経』の全体で特に見仏を強調している品は十地品である。各地の末尾には必ず百千億・無量仏の見仏を強調している。最初の歡喜地では歡喜地に留まると、大願力によって多くの仏を見ることができ、特に家族を捨てて出家し、勤行精進する中で各種の三昧と諸仏を見ると言っている。この内容は離垢地においても同じである⁴⁴⁾。次の発光地、焰慧地、難勝地、現前地、遠行地では、菩薩は願力によって多仏を見て一念頃に百千三昧に入り、無量仏を見るという。そして、現前地から法雲地までは本文では示現菩薩とし、偈頌ではそれと違って見仏と表現している点も指摘すべき問題であろう⁴⁵⁾。また、不動地、善慧地、法雲地ではこれまで願力と言った部分を三昧力によって多仏をみることになるとしている⁴⁶⁾。願力の見仏と三昧の見仏に差があることを表していると理解できる。不動地では仏の二種十身を説いている点からも見仏の関連性が重視されている。菩薩は衆生の心の中の願うところにより、衆生身をもって自身としたり、その他に業報身、虚空身などをもって自身としたりして種々の身を表すという⁴⁷⁾。第10の法雲地はまさに仏位と同等な受職菩薩位として菩薩が十種の三昧を得て、衆生の欲楽によって色身、莊嚴具足身、仏身を示現して自身とするという。さらには国土と仏身を自在に示現し、仏身と衆生身と自身及び有情・無情の円融無礙の境地を説いている。

次に入法界品では声聞弟子の見仏と菩薩の見仏を克明に区分させる経文を見ることができる。この問題は舍利弗尊者を上首とする六千比丘の話と相応する部分で、二乗は絶対に如来の境地を見ることも、分かることもないと強調している⁴⁸⁾。しかし、仏身の立場からすると、十方にあまねく存在するため見れない者はいないとしていて、仏身の方では円融無礙の能見を説き、機根の方では二乗の不見を

(34)

華嚴の仏身と見仏の意義 (陳)

説いていることが指摘できる。

5. おわりに

本論文は華嚴の仏身と見仏が相互に関連があることを明らかにしたものである。特に『華嚴經』における仏身の多様性と円融性は十方と三世のどこからでも、いつでも見られるはずだが、一乗と三乗、声聞と菩薩、衆生の心の中の追求の度合いなどによって見る眼目を備えることも大変重要であることがわかる。

なお、願力と三昧の境地で見仏が可能である一方、信心のない衆生は決して仏を見ることはできないとする部分も重要である。見仏の根本は離世間品の十種の見仏であり、無著見、出生見、深信見、随順見、深入見、普至見、安住見、無量無依見、明了見、普受見などは仏の十身を十種の内容として見るができることを意味している。

-
- 1) 吉蔵『華嚴遊意』(大正蔵 35.1中)。
 - 2) 玉城康四郎「華嚴經における仏陀觀」『講座大乘仏教3 華嚴思想』, 春秋社, 1983, pp.181-187。
 - 3) 陳永裕「華嚴經に表れた仏陀觀」『仏教思想と文化』第1号, 中央僧伽大学校, 仏教学研究 研究院, 2009。
 - 4) 『搜玄記』(大正蔵 35.16上-中)。
 - 5) 『搜玄記』(大正蔵 35.83下)。
 - 6) 『華嚴五十要問答』(大正蔵 45.519上-中)。
 - 7) 『華嚴五十要問答』(大正蔵 45.520上)。
 - 8) 『華嚴五十要問答』(大正蔵 45.520上, 521中)。
 - 9) 『孔目章』(大正蔵 45.560上)。
 - 10) 『孔目章』(大正蔵 45.580上-中)。
 - 11) 『華嚴一乘法界図』(大正蔵 45.714上)。
 - 12) 『法界図記叢髓録』と『古記』については, 全海住『義湘華嚴思想史研究』, 民族社, 1993, p.157 参照。
 - 13) 『法界図記叢髓録』(大正蔵 45.758上)。
 - 14) 『華嚴經旨歸』(大正蔵 45.591上)。
 - 15) 『華嚴經旨歸』(大正蔵 45.591上-下)。
 - 16) 『華嚴經三宝章』(大正蔵 45.621中-下)。
 - 17) 『華嚴經探玄記』(大正蔵 35.107上)。
 - 18) 『華嚴經探玄記』(大正蔵 35.130上-中)。
 - 19) 木村清孝「十仏説の展開」『印度学仏教学研究』33-1, 1984, p.88。
 - 20) 『華嚴經疏』(大正蔵 35.505上)。

- 21) 『華嚴經疏』(大正蔵 35.505下-506上).
- 22) 『華嚴經演義鈔』(大正蔵 36.31上). すでに智儼の『搜玄記』, 離世間品の注釈で次第三辨説十仏化被於他・初三報仏次三化次四法仏・此但一相解耳の三身対応の例を見ることができる(大正蔵 35.83下).
- 23) 『華嚴法界玄鏡』(大正蔵 45.672中-下).
- 24) 『華嚴經』(大正蔵 10.299中).
- 25) 『華嚴法界玄鏡』(大正蔵 45.672下).
- 26) 玉城康四郎「華嚴經における仏陀觀」『講座大乘仏教3 華嚴思想』, 春秋社, 1983, p.187, 192 で澄觀の時にになって毘盧遮那仏が強調されたと主張する.
- 27) 『華嚴經』(大正蔵 10.22中).
- 28) 『華嚴經』(大正蔵 10.30下, 31下, 64下).
- 29) 『華嚴經』(大正蔵 10.9上, 266上).
- 30) 『華嚴經』(大正蔵 10.9上, 22上, 150中, 226中, 277中).
- 31) 『華嚴經』(大正蔵 10.325上-326下).
- 32) 『華嚴經』(大正蔵 10.102上).
- 33) 『華嚴經』(大正蔵 10.272下).
- 34) 『金剛般若波羅蜜經』(大正蔵 8.751中).
- 35) 『大智度論』(大正蔵 25.305下-306上).
- 36) 『華嚴經』(大正蔵 10.302下).
- 37) 『華嚴經義海百門』(大正蔵 45.630上).
- 38) 『華嚴五十要問答』(大正蔵 45.519上).
- 39) 『華嚴五十要問答』(大正蔵 45.519中).
- 40) 『搜玄記』(大正蔵 35.86中).
- 41) 『新華嚴經論』(大正蔵 36.758中-下, 769上).
- 42) 『華嚴經』(大正蔵 10.308上).
- 43) 『華嚴經探玄記』(大正蔵 35.436下), 『華嚴經疏』(大正蔵 35.892上, 904中).
- 44) 『華嚴經』(大正蔵 10.183上, 183下, 186中-下).
- 45) 『華嚴經』(大正蔵 10.195中と 195下を比較検討).
- 46) 『華嚴經』(大正蔵 10.200下).
- 47) 『華嚴經』(大正蔵 10.200上).
- 48) 『華嚴經』(大正蔵 10.323下3, 24上).

〈キーワード〉 華嚴, 仏身, 見仏, 十眼, 眼目

(中央僧伽大学校教授, 仏博)